

れき じん

となん歴史民だより vol.19

Morioka tonan history and folklore museum

平成21年6月24日発行

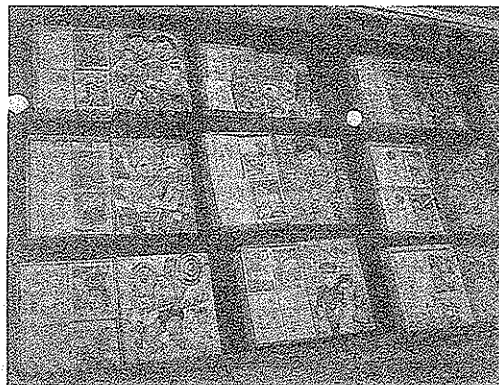
発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38' TEL019-638-7228

【報告】

今回の市民参加展「歌留多いろいろ展」は、歌留多という馴染みのある遊びをとりあげることによって、身近な「もの」に対する歴史などに興味関心を持ってもらおうということを趣旨に開催いたしました。

本展においては、資料所蔵者の鎌田隆氏のご尽力によりすべての作業が円滑に行われました。また、報道各社（テレビ局3社、新聞社1社）のご協力によって多くの市民の皆様にご来館頂きました。

この場を借りて市民参加展に協力して頂いた氏ならびに報道各社に厚く御礼を申し上げます。



歌留多いろいろ展に展示されたレトロなかるた

盛岡市都南歴史民俗資料館で、展覧会「歌留多いろいろ展」が開催された。かるたの歴史や、歌留多の文化について、市民参加展「歌留多いろいろ展」が、市民の関心を呼び起こしている。盛岡市都南歴史民俗資料館の展示室に、歌留多の歴史や文化について、市民参加展「歌留多いろいろ展」が、市民の関心を呼び起こしている。

百人一首からアニメまで
盛岡市都南歴史民俗資料館
展覧会「歌留多いろいろ展」開催

盛岡市都南歴史民俗資料館で、展覧会「歌留多いろいろ展」が開催された。かるたの歴史や、歌留多の文化について、市民参加展「歌留多いろいろ展」が、市民の関心を呼び起こしている。盛岡市都南歴史民俗資料館の展示室に、歌留多の歴史や文化について、市民参加展「歌留多いろいろ展」が、市民の関心を呼び起こしている。

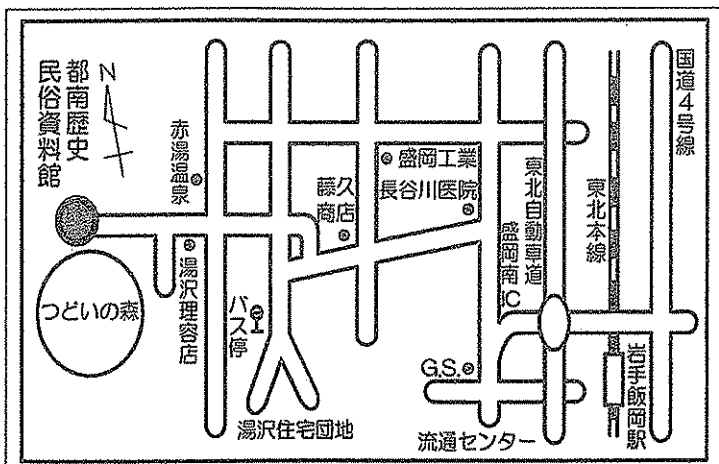


市民参加展「歌留多いろいろ展」記事
(盛岡タイムズ・5月12日付)

— もくじ —

- ・〈寄稿〉
「幕府を敷いた、12代利用公普え玉事件」
- ・盛岡藩領内に伝わった『たとえ』③
- ・資料は語る⑩
- ・盛岡市所在 指定・登録文化財紹介⑩
- ・となんの昔ばなし⑩

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間 午前9時から
午後4時まで

入館料 無料

休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)

年末年始

幕府を欺いた、12代利用公替え玉事件

都南歴史民俗資料館 館長 田 鎖 壽 夫

文政4（1821）年5月、江戸・盛岡藩上屋敷の庭で遊んでいた第12代藩主利用公は、木に登って遊んでいるうち誤って下落、その後足に異常を覚え、不自由な感があったものの、その他に異常は見あたらず、通常的生活を送っていた。

しかし8月21日の朝になって急変、にわかに足の感覚が麻痺（まひ）し、遂に死亡するに至ったのである。年齢16才であった。

突然の急変に驚いたのは江戸屋敷の諸士であった。なぜならば利用公は若年で跡継ぎの子どももなく、将軍に対して初謁見（はつえっけん）をおこなっておらず、突然の死が幕府に聞こえると家名断絶に及びかねない事態が想定されたからである。

そこで、江戸屋敷の家老格（かろうかく）や側用人（そばようにん）が密議し、幕府に知られないように死骸（むくろ）を国元・盛岡に還送、利用公の身代わりを立てることを思いつくのである。幸いにも将軍や幕閣に顔を見られていないことが、その決断を導いた。直ちに国元に早馬を立て、死骸を入れるように改良された長持ちは大工を屋敷に呼んで作製させた。このようにして出来上がった長持ちには下部に死体を、上部には南部家菩提寺である聖寿寺（しょうじゅじ）への奉納物として物を入れ、8月25日の夜半に人目を避けて江戸を出発するのである。追従者は御持筒頭（おんもちつつがしら）・吉田友右衛門を始め10名であった。栗橋には幕府直属の番所があった。江戸への出入りを改める番所で、特に鉄砲や武具、集団での出入りを改める番所であった。かくしてこの番所に差し掛かると、異風の長持ちと追従者が多いことに怪しまれ検閲され、一同これまでと覚悟を決めるところまで追い込まれるが、辛うじて関門を通過し宇都宮にようやく到着。しかし長持ちを担いでいた陸尺（ろくしゃく）は全員足を痛め1歩も進めず、やむを得ず地元の陸尺を雇い入れ、9月8日盛岡に到着するのである。

国元では、利用公急死の急報を受けるや、一族重臣が集まり協議、南部信丞（のぶつぐ）の養子・駒五郎を身代わりとして第二の利用公にすることに決し、死骸が盛岡に到着する前日に、わずかな追従者とともに江戸に向かって出発するのである。かくして駒五郎は江戸に到着するや、幕府および他の藩に対し、自ら利用吉次郎と称し、11月には献上物を持って将軍・家斉公と謁見、替え玉作戦は見事に成功するのである。

この史実を記している唯一の資料は『南部史要』である。『南部史要』は、明治36年から、原敬が私財を投じ、編集委員会を立ち上げ、あらゆる資料を参考に編纂された史要である。前述の替え玉作戦は、盛岡藩上層部のごく限られた者だけが関わり、内密裏のうちに成功した事件であって、これを記述する古文書など到底あるはずがないのである・・・が、『南部史要』には、その詳細を記してある。果たして、その出典は？

一つに次のような説がある。

江戸から盛岡に送った長持ちの追従者は10名と記したが、その中の一人は、原敬の祖父・原直記（なおき）が入っている。替え玉作戦の密議と決行と一部始終を見届けた人物である。原敬は幼少の頃、祖父・直記本人か、もしくは父・直治にその事件のあらましを教えられていて、『南部史要』編纂の際、その記憶を基に文章化したのではないか・・・という説である。この説は是か非か・・・その解明も興味深いものがある。

盛岡藩領内に伝わった「たとえ」③

「^わ分^わか^{べこ}った^{つめ}分^わか^{べこ}った^{つめ}牛^の爪[。]

^わ分^わか^らね^え分^わか^らね^え馬^の爪[。]

牛の蹄^{ひづめ}は二つに分かれ、馬の蹄は分かれておらず丸みをもっていますね。わかった、わからないということをそれぞれ牛と馬の蹄^{かたち}の形^{ひと}に^{はなし}かけ、人の話^{しやれ}について「よくわかったよ、牛の爪のように」や「さっぱりわからないな、馬の爪のように」と洒落^{しゃれ}ていう「たとえ」のことをこのようにいいます。

参考・引用資料：毛籐勤治編著『北東北のたとえ』、岩手日報社、1994。

資料は語る

⑱脇差（わきざし）

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します。

当資料館には、島香廉氏によって寄贈された宮川秀一^{みやかわひでかず}（1813～87）作刀の脇差が二振りあります。この宮川秀一は、天保2年（1831）に盛岡藩士^{とちないよへいせい}柄内与兵衛に従って江戸へ行き、石堂運寿^{いしどううんじゆう}一の門下となったのち、紀州（現在の和歌山県）御用鍛冶舞鶴友秀^{ごようかじ}に師事し、安政5年（1858）に盛岡藩御抱えの刀鍛冶になった人物です。戊辰戦争では、宮川秀一作刀の刀が武庫刀^{ぶことう}として採用されていました。

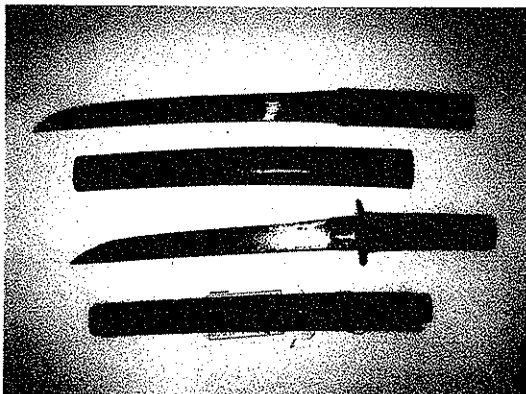


写真1（全体）

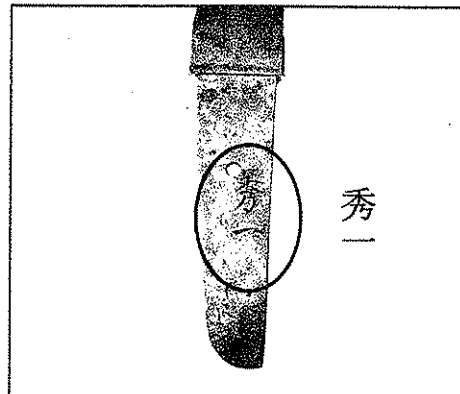


写真2（銘）

参考・引用資料：『岩手県姓氏歴史人物大辞典』、角川出版、1998。

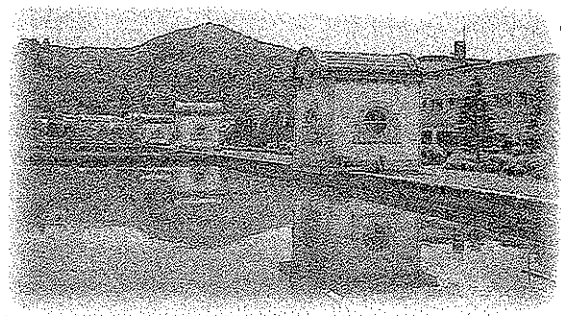
『日本広辞典』、山川出版社、1997。

国登録有形文化財

よないじょうすいじょう
米内浄水場

平成 11 年 8 月 23 日登録

所在地：上米内字中居 49



近年、文化庁が「近代化遺産の日」(10月20日)を定めるなど全国各地で「近代化遺産」が注目を集めています。盛岡市も例外ではありません。そこで今回は、米内浄水場を紹介します。米内浄水場は昭和7年(1932)に着工しました。これは当時の盛岡市の一般会計を上回る大事業でした。

現在、水道記念館となっている旧管理事務所はドーマー窓を配した洋風建築で美しい姿を現在に残しており、70余年経った現在でも現役として盛岡市内への水の供給を助けています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』,2008。

となんの昔ばなし⑩
『和を志せ』

紫波郡の「しわ」の漢字は、古い本に「志波」「斯波」「子和」「紫波」と書かれています。

昔、それは今から四百年ほど前のことです。郡をおさめていた斯波の殿様が、南部の殿様に亡ぼされた頃のことです。

南部の殿様は、

「今まで紫波と書かれていた字を志和とかえよう。

村人たちは戦いで心も身も荒れはてている。和を志し、農作業にはげめ。」と命じました。

その後、二百五十年ほどたった天保年代、江戸幕府が「しわ」がいろいろな字で書かれているが、どれが正しいのかと南部の殿様に聞き出しました。

殿様は、慌てていろいろ調べて「志和が本当です。」と答えたということです。それが明治になってから幕府に味方をして南部の殿様は敗れたので、天皇の政府にとどける郡名は殿様がつけた郡名では失礼だろうと、むかしからの紫波郡と書くようになったということです。